

The 34th JLTANE (Japanese Language Teachers Association in New England)
Smith College, 2021 June 12

「日本語教育における原点の再考察」

多和わ子

アマースト・カレッジ

米国の大学で外国語としての日本語が履修登録できるようになってから120年余りになる。この120年の間には、日本語教育に関する研究も活発になり、様々な指導法が提案され、日本語の教科書も選択肢が増え、夥しい数のオンライン学習ツールが開発されてきている。また、これらの発展と共に日本語教育関係の学会発表には多くの専門用語が飛び交っているのが現状である。

本講演の主旨は、この120年の間に成し遂げられてきた様々な日本語教育の分野の発展の根底に流れている普遍的な要素のいくつかを取り上げ、それらの相互関係に焦点をおいて考察することである。本演題に「原点」という言葉が使用されているが、原点を具体的な言葉に入れ替えようとする、色々な用語が取り上げられるであろう。原点という言葉は明鏡国語辞典(初版)では「物事の根拠・根源になる出発点」と定義されているが、本講演で使用する原点という言葉もそれに近い意味で使用されている。日本語教育においては、教師は、日本語を母語としない学習者に日本語を外国語として教え、また、学習者は、母語としない日本語を外国語として学習する。この当然である「日本語」、「指導」、「学習」とを日本語教育の原点と位置付け、それらの相互関係を考察し、さらに、実践において具体的にどのような応用が可能であるのかを検討するのが本講演の目指すところである。尚、これらの原点に関連する課題は、違った角度からではあるが、多分野において論議されてきていることから、本講演の題目には再考察という言葉を使用することとした。

この主旨について大まかに説明を加えると次のようになる。人類の言語は、どの言語を取り上げても、改新的であるという普遍的な特質を持っている(西山 2001)。この改新的な特質を知ることは、言葉を教える教師と学習者にとっては重要な知識となるが、同時に、指導・学習対象が何語であっても、この特質は教師が教え、学習者が学ぶという目標自体に無限の複雑さを増すことになる。その上、学習の過程を理解することが効果的な指導の鍵を握っているということは、どの教師も理解していることではあると思うが、学びを測る対象となる理解と産出の過程は客観的な観察が不可能であるため、教師には指導の実践に大きな壁が築かれてしまっている(山鳥 2001)。その結果、指導の対象が何であっても、教師であれば、だれもが経験する学習者の間の学習度の個人差をうむこととなるのである。教師が指導したと思っていたことを学習者が学んでいなかったり、教師が説明したことを学習者が誤解していたりするという現象は常に起こり、どんな指導法や教科書を使用しても、消えることはない。個人差が起きる理由は、学生個々の事情に加え、ここで述べた言語の改新的な特質、指導と学習の過程の複雑な相互関係など無限にある。

言語の特質や学習過程に関して多くの学者たちが長年、研究に携わっているが、解明されていないことが多くある。これは、外国語教育の分野のみの現象ではなく、全ての分野においても同じであり、教師たちは創意工夫によって指導し続けている。日本語教育での言語・指導・学習研究の発展と限界を認知することは、今後の指導への創意と工夫に意義深いものとなるであろう。